

クローズアップ NGO・NPO

(認定) 特定非営利活動法人

フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダー JAPAN

アジアの恵まれない子どもたちに笑顔を！

■ 日本人カメラマンが ■ カンボジアに病院を創設

フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダーは、カンボジアのシェムリアップ市に非営利の小児病院を設立した認定NPO法人です。

1993年、遺跡の撮影でアンコールワットを訪れた写真家・井津建郎は、医療事情の貧しさゆえに命を落とす子どもたちを目の当たりにします。「自分はアンコールでTake (pictures) ばかりだったが、Giveもすべきではないか」と考えた井津は、非営利の小児病院を設立することを決意しました。

とはいえ、ボランティアや国際貢献にしても、医療にしても全くの素人。まずは学び、情報を集め、身近な協力者を募るところからのスタートでした。1995年、井津の呼びかけにより、フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダーがニューヨークで設立され、翌96年には東京にもオフィスを設置。日米を中心に3,000人を超える支援者を得て、1999年にアンコール小児病院が開院しました。



アンコールワット観光の拠点・シェムリアップ市内にあるアンコール小児病院の外観

■ 先進国同様の医療と教育を ■ 非営利で実践

アンコール小児病院は、新生児から15歳まで

の子どもたちを対象に、24時間態勢の救急病院として小児内科、外科、歯科、眼科診療を行っています。院内には個別ブースに仕切られた外来診察室、入院病棟、手術室、救命救急室、集中治療室 (ICU)、リハビリ室、歯科診療室、眼科診療室を完備。1日平均約400人の患者を診療しています。

外来待合室では、カンボジア保健省の推奨するIMCI (小児疾患総合管理システム) を取り入れたトリアージを実施。看護師が事前に患者の重症度に優先順位をつけ、迅速かつ効率的な診察を行っています。

また、アンコール小児病院はカンボジア政府から認定された教育病院 (医療スタッフの育成を行う医療施設) でもあり、2003年には病院敷地内に医療教育センターを開所しました。ここでは、院内スタッフの教育はもちろんのこと、国内外の医療関係者、看護学生、政府機関で医療・保健衛生にたずさわる人たちにも研修やトレーニングを行っています。

医療従事者教育と並行して力を注いでいるのが患者と家族への教育です。アンコール小児病院では、入院中の患者とその家族に、栄養の取り方や病気予防などについて、さまざまな手法を用いながらわかりやすく教えています。

そもそも、カンボジアの子どもたちによくみられる疾患や、多くの患者が治っては再罹患^{りかん}することを繰り返す原因のひとつが、保健衛生や栄養に関する意識の低さです。保健衛生観念が浸透していないがゆえに病気の子どもが後をたたない、と

言っても過言ではありません。そこで、病院内での教育にとどまらず、農村へ出向いての教育活動も積極的に行っています。

これは『地域医療支援・保健教育プログラム(CBHEP)』といい、病気予防や病気になった時の対処法、栄養指導などを、村民自身の自主性を引き出しながら行う病院独自のプログラムです。村での取り組みの一環として、政府運営の保健センターにおける医療の質の向上を目的としたトレーニングや、運営指導も行っています。

臨床と公衆衛生の両面から医療にアプローチし、教育プログラムで人材を育成。これら【医療】【教育】【地域支援】がアンコール小児病院の大きな3本柱です。



外来待合室の様子。1日平均約400人、多い日には600人を超える子どもたちが訪れます

■ “郷に入っては郷に従え” 式 ■ プロジェクトの発案

院内にはほかに、活動していく中から生まれた独特のプロジェクトもあります。

経過観察が必要な慢性疾患患者など、家庭でのフォローアップが必要な患者を定期的に訪問する『訪問看護プログラム』、そして小児HIVに関して国内でも先端のケアを提供している『HIV/AIDSプログラム』です。これらは、開院まもなくから看護指導者として勤務する赤尾和美看護師が発案し、プロジェクト化したものです。

日本の大学病院、ハワイのHIVクリニックを経てカンボジアに渡った赤尾の奮闘ぶりは、著書『この小さな笑顔のために～日本人ナースのカン

ボジア奮闘日記～』につづられています。

文化の違い、国民性の違い、民間療法や^{きとう}祈禱への信頼と依存、孤児院や就職支援施設探しと、それらへの入所交渉、父親への道徳教育など、およそ日本の病院では考えられない事態、業務が次から次へと舞い込む病院の日常は驚きの連続です。また、生活者視点で語られるカンボジア人の暮らしぶりはとても興味深いので、ぜひ、ご一読ください。本のお問い合わせは当事務局まで。

■ 分院的存在=サテライトクリニックを開院

2010年、アンコール小児病院は、シェムリアップから35km離れたソトニコム郡立病院内に、サテライトクリニックを開院しました。サテライトクリニックでは、アンコール小児病院で^{はぐく}生まれた治療・教育・予防の総合アプローチをそのまま実践します。つまりは、分院のような存在です。

アンコール小児病院の患者は数十km先からやって来るとも多く、最悪の場合には、たどり着いた時には手遅れになってしまうケースも。地方の病院がレベルアップでき、患者が居住地域で安心して受診できるようになれば、そうしたケースを減らすことができます。このサテライトクリニックは10年の期間限定プロジェクトとして行われ、地方の小児病棟にテコ入れすることで、地域医療向上の一助となることを期待しています。

■ カンボジア人による ■ カンボジア人のための病院へ

アンコール小児病院を開院する際、10年後には私たちの手から離れ、カンボジア人の手で運営されることを目標としていました。現在、開院から13年。さまざまな問題が解決されず、現地化が実現できずにいましたが、ついに、現地化への具体的なメドが立ってきました。

それに伴い、フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダーは、団体設立時の目的でもある「アジアの恵まれない子どもたちへの支援」という視点に立ち、これから何ができるか、何をすべきか、新たな取り組みについて模索を始めています。アジアの子どもたちにもっと笑顔を！